

▶生活・心の扉

登下校で心を育てる（その3）

羽 場 邦 子

1 子どもたちは、守られています

わたしたちは、本校PTAによる生活部だよりやバス会社の方の話、一般の方からの情報などで、登下校時の子どもたちの様子を知ることができます。言い換えると「子どもたちは、たくさんの方から命を守られている」ということになります。幸せなことですね。でも、子どもたちは、自分たちが守られていることに気づいているのでしょうか。残念なことにそうではないように思います。子どもたちが気づくためには、どのような気もちで子どもたちに向き合い、どのような言葉かけをすればよいのか、一緒に考えてみませんか。

2 まさか我が子が…もしかしたら我が子も…

登下校での様子をほんの少し紹介します。

バス停で………○ガードレールに上がって身を乗り出す。

○バスがまだ停車していないのに、我先に乗ろうと動く。

車内で………○立ち歩く。乗降口付近に固まる。空席があっても座らない。大声で話す。

運転手さんの注意を聞かない。乗客の方の足を踏んでも謝らない。

J R 駅で………○改札口を出たり入ったりする。駆け込み乗車をする。ホームで遊ぶ。

歩道で………○バスが来たら赤信号でも横断歩道を渡る。左右確認せずに飛び出す。

○歩道いっぱいになったり車道にはみだしたりして歩く。

○ふざけて車が来ているのに友達をわざと車道へ押し出す。歩いている人にぶつけようと友達を押す。友達の帽子を取って投げる。おにごっこをする。本を読みながら歩く。

仁保橋で………○歩道いっぱい歩く。走る。前を歩く人を追い越そうとして自転車にぶつかる。(仁保橋は、一列で歩く約束です。)

まさか我が子は、こんなことはしていないと思われましたか。それとも、我が子もしているかもしれないと思われましたか。子どもたちは、自分の命が危ないとは思っていません。あるいは、自分の行為が周りの人の責任になるとは想像もしていないでしょう。(バスや電車、JRでの事故は誰の責任になるのでしょうか。横断歩道や車道での事故は誰の責任になるのでしょうか。)

登校班別集会で「大きな声で騒いでいる人がいました。」「道いっぱい広がって歩いていました。」など、子どもたちは、人ごとのような発言をします。「あなたはどうですか。」とわたしは聞き返します。自分の姿を振り返ることが必要ですね。

本校PTA生活部だよりも、子どもたちの様子を丁寧に書いてくださっています。もしかししたら我が子も、という気もちでお読みになり、お子様と向き合ってみてください。

▶教育随想

アクアリウム

川 口 浩

今、私の部屋には二つの水槽があります。中では、水草と、数匹のえびと魚が泳いでいます。これは、温度管理と水質管理がされた熱帯魚の水槽です。

鳥の刷り込みで有名なコンラート＝ローレンツの著書に、動物行動学のバイブルとされている「ソロモンの指輪」という本がありますが、その中の「アクアリウム」という項に水槽の話が出てきます。春先に砂を入れた水槽に水草の切れ端を差しておくと、それが育ち、水質が安定します。その後生き物を入れます。水槽内のバランスが保たれている限り、人が手を掛けなくても水槽は安定した状態を維持し続けるのです。このような水槽は、ローレンツ型アクアリウムと呼ばれているのだそうです。しかし、この水槽にもう一匹きれいな魚を泳がせたいという欲求に負けて魚を入れた瞬間から水槽内のバランスが崩れ、一旦バランスが崩れると、水槽の中はどろどろの肉汁になってしまうというのです。

小さい頃、我が家にはこのローレンツ型アクアリウムがありました。庭の生垣の影に置かれた火鉢がそれで、中には半分に割ったコンクリートブロックが入れてあり、水草と夜店で買った一匹の金魚と田んぼ脇の用水路で捕まえてきた一匹のザリガニが入っていました。世話をすることは無く、水を替えることもしません。蒸発した水は雨水が補うてくれました。それなのに、この火鉢の中の水は濁ることなく、何年も澄んだままでした。何かのついでに覗いた時には、いつもと変わらず金魚とざりがにがその中で暮らしていました。

ただ、一度だけびっくりしたことがあります。ざりがにが死んでいたのです。その時、ざりがにが死んだことにはさほど驚きもせず、死体を庭に埋めたのですが、数日後、なぜかそれまでと変わらぬ様子で、ブロックの穴からザリガニが顔を出していたのです。私も家族も、狐につままれた思いでした。ザリガニは脱皮をするということ、自分たちはその抜け殻を死体と間違え庭に埋めたのだということが分かったのはしばらくしてからでした。

私の部屋の水槽はローレンツ型水槽ではありませんが、実に様々な表情を見せてくれます。環境が整っている時には、それこそ何の手を加えなくても水は澄んだままで、水草も美しい姿を見せてくれますが、ひと度バランスが崩れると、どう手を尽くしても取り返すことができず、アオミドロに埋め尽くされてしまいます。やっかいなのは、なにが原因でバランスが崩れることになったのかが全く分からないことです。

アクアリウムとは何の関係もありますが、水槽を見てみると、稲作農家の話を連想してしまいます。米作りをするお百姓さんは、「米を作る」とは言わないのだそうですね。お百姓さんが作るのは、と言うよりむしろ作ることができるのは、あくまで「田」なのだそうです。そして、米は「作る」のではなく、「できる」のだそうです。

本当に、「自分が作った」と言えるものがどれほどあるのだろうかと考えさせられます。人の力でできることは、環境を整えるための手助けをすることぐらいなのではないでしょうか。そこで育つものがよりよく育つために環境を整えること、それが人の為すべきことであり、また、同時に限界でもあるのだらうと思わされます。